

随想

STAP細胞騒動について考える(後)

マニユアル化し信頼が崩壊した「博士号」という学位

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

STAP細胞騒動は、四月十五日に理研の笹井芳樹副所長が記者会見をして、一つのピークを越えた感がある。

前回の寄稿の折にも触れたが、小保方氏の問題はSTAP細胞が存在するかどうかより、研究者の基本的な能力問題にこそ焦点が合わせられるべきである。多くのマスコミ報道では小保方氏の研究能力より、その稚拙さからSTAP細胞がない可能性を前提とし、それに対する反論あるいは存在の可能性を示唆する意見があればそこに問題を重ねている。

著者は小保方氏が意見を表明する度に、どうしようもない違和感を持ってしまふ。氏の主張を裏付けるデータが一向に開示

されないからである。テレビや新聞、週刊誌等による報道を見聞する限り、STAP細胞と小保方氏、理研に話題が限定されている。しかし、理研としても氏を採用するに当たって、早稲田大学から授与された博士号の学位を前提としていたことは疑いない。もし学位がないなら、研究職員として採用されるはずがない。

学位には原則四年の学習を経て十分な学力があると認定された卒業生に与えられる学士、2年の課程を経て論文を記述する能力を得たことを前提として与えられる修士、および複数の論文を以て新しい真実の積み重ねの下に自分自身の世界を理論的に証明する能力を得た者に対し

ての博士の学位があり、博士であれば、複数の新しい事象を発見、開発しそれらをストーリーとして組み上げること、それを通して哲学の世界を開くこと、さらにその道を求める人を指導して学位を与えるだけの実力を有していることが求められる。これは、大阪府立大学から九州産業大学、さらには九州共立大学の教授として工学エリアの研究に生涯を捧げた著者の父が、著者が学位を得るに当たって教えてくれた教訓である。

著者は四七年も前に鶏病の世界に飛び込み、博士号に繋がる研究としてニューカッスル病の病理学的研究を始めた。具体的な指導を得ないで続ける研究の最中で、博士号を得るまでは目

の前に大きな壁が立ちただかっているように感じられ、どのように道を開けば良いのかわからない、迷走しているような感覚に悩まされていた。無我夢中でいくつかの論文を書き、それによって学位を得てからは、サイエンスの世界を俯瞰できるようになり、道を開くノウハウのようなものを感じた。まさに、この体験こそが重要なのである。その意味で、現代の博士課程で得る学位はあまりにもマニユアル化されてしまったように思われる。

父の言う学位(博士号)は、長年の研鑽の蓄積に対して社会の評価として与えられるものである。しかし、今日では博士が研究職に就くための条件とされ

る。これはアメリカの影響かもしれない。

学位を得るために大学院の博士課程に入学し、三年間に二つ以上の論文をそれなりの専門誌に投稿、掲載もしくはアクセプトされれば、最低条件をクリアしてしまふ（もちろん専門の力リキュラムでそれなりの講義を受講せねばならない義務はある）。

今ではほとんど話題にされないが、小保方氏の博士号は早稲田大学で与えられている。この論文の写真が問題の《Nature》論文にも流用されたと言われている（小保方氏によれば、博士論文の写真ではない、という情報もある）。

この論文には二、〇〇〇文節もの部分のコピペされて、その引用記述もないと報道された。その情報を前提として考えれば、他人の論文の盗用と判断されても仕方あるまい。

小保方氏を指導した笹井博士が四月十六日に記者会見を開いた。この会見で笹井氏が開陳し

た意見には、いささかならず問題を感じざるを得ないが、それはさておき会見で「豊かな発想力と高い集中力がある。今もそう思っている」と述べる一方で「データを間違えるようなずさんさもあつた。両極端が一人の中にある」と話している（朝日新聞四月十七日朝刊三面）。

そのコラムによれば、笹井氏は京都大医学部を卒業後、米カリフォルニア大ロサンゼルス校等を経て、三十六歳で京都大教授に就任。ES細胞を目や神経などの組織に変化させる研究で世界に知られる、と紹介されている。

これだけ優秀な人には、それゆえの欠点がある。「自分でできることは、他人にもできて当たり前」と感じてしまうことである。多分笹井氏には、小保方氏の能力に対する過信があつたのだろう。その原因の一つは、《早稲田大の博士》であるという条件である。

そう考えれば、早稲田大の責任は重い。博士という学位がど

れほどのものを認識して、それにそぐわない能力の人には学位を与えてはなるまい。大学の格を信用し、博士号という学位が能力を保証するものと信じて業務を与える社会システムの崩壊を招いた、ともいえる。

著者には、この事件はわが国のサイエンスへの国際的な評価を地に落としたと感ぜられてならない。世間はあまり話題にしないが、早稲田大学の教育の場としての責任は極めて重い。

情報によれば理研と京都大学はライバル関係にあり、ES細胞等の再生医療に関する万能細胞の研究でも先を競っていたという。iPS細胞で山中教授がノーベル賞を受けるまでは、どちらかといえば理研が先を走っていた。iPS細胞で先を越された理研としては一発逆転を期したとしても不思議はない。同様の推理は週刊文春でもなされている。誰が考えても同じようなストーリーが浮かぶことに、今回の事件の根っこに潜む根本問題があるように感じる。

人類史上初めての人工衛星スプートニクをソ連が打ち上げたのは、著者が高校二年生の秋であつた（一九五七年十月四日）。それまで幻想の世界にあつた「月」が、いきなり現実の世界になつた衝撃は強烈であつた。その翌月であつたか、新聞の紙面を《米国が人工流星を打ち上げた》というニュースが飾つた。当時高校生だつた著者たちにとつても、アメリカが大慌てで取つた対策は噴飯ものであつた。それほどにソ連による人工衛星打ち上げ成功はアメリカにとつて大きなショックだつたのだろう。今回の《STAP細胞》騒動は、この時の大慌てのアメリカの状況を思い起こさせる。もつとも、これを機に立てられた月面着陸《アポロ計画》でアメリカは失地回復を成し遂げ、この計画で取り入れられた宇宙食の安全性確保のシステム《HACCPシステム》が現在、わが養鶏業界へも大きな影響を与えている。